大神姓佐伯氏の研究 (3)

佐伯荘成立までの歴史

さとうたくみ
（会員　佐伯市池船町）

鎌倉時代の佐伯氏を語る前に、佐伯荘が成立する以前の歴史的背景を知っておく必要がある。古代の佐伯については史料が少なく推論の域を出ないが、「佐伯一族の興亡」に詳しく論述されているので、ここでは私感による概略を述べておこう。

穂門郷と佐伯部

佐伯地方の縄文から弥生時代の遺跡分布を見れば、古代の人々は番匠川流域に普遍的に居住していたと考えられる。また五～六世紀の古墳が番匠川河口域に集中していることから、水上交通の要衝を押さえた首長の存在を知ることができる。

樫野古墳の石棺と人骨

天平五年（七三三）に編纂された『豊後国風土記』には、海部郡の百姓はみな海辺の白水郎（あま）で穂門郷の民は海産物（海藻）を税として納めたことが暗に語られている。

九州では七～八世紀にかけて日向隼人の反乱が度々起こり、養老四年（七二〇）の反乱で政府軍は大伴旅人を大将軍に太宰府管内の軍団を隼人討伐に向かわした。もちろん豊前・豊後も例外ではなかったが、朝廷軍の兵員や軍事物資は、陸上のみならず海上輸送されている。こうした時代背景の中で、佐伯湾が国防上重要な兵站基地として認識されたのではあるまいか。

佐伯の地名起源について諸説あるが、ここに海上警固の佐伯部(東北の蝦夷)が防人として配置されたと理解しておきたい。

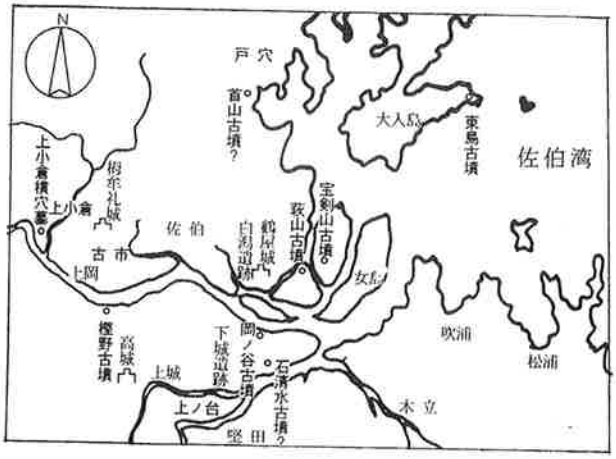
佐伯院と天慶の乱

佐伯部の居住地はやがて地名となり、後に佐伯院が設置された。院とは延暦十四年(七九五)七月および九月の太政官符によって、一ないし数か郷ごとに租税を収納するために新に分置された「倉院」すなわち正倉のことであるという。

穂門郷は日向境に至る海岸線と番匠川流域の山間部を控え、海部郡四郷のうちでは最も広い領域を占めていた。佐伯院の設置は、これまで海人の住む穂門郷という『豊後風土記』の漠然とした認識から、この地域にも律令制が確立され、番匠川流域の山間地に至るまで公地公民制が浸透して行ったことを物語っている。

「天慶四年(九四一)八月、西国の賊首藤原純友の次将・佐伯是基ら賊徒が日向国の管に襲来して、同月十七・八両日に合戦、官軍有利に凶賊を討殺するうち、件の是基を生け捕った。また九月六日、賊徒が豊後国海部郡の佐伯院に襲来して申時(午後四時)より酉刻(午後六時)まで合戦の間、桑原生行を生け捕り、賊徒を撃殺して馬船・絹錦・戎具・雑物を討ち取った」と『本朝世紀』は伝えている。

一〇世紀には、これまでの班田制が廃絶して人頭税か



史跡分布図

ら土地税へと移り変わる中で、領域的な行政区画を持つ新しい郷や院が再編され、国衙支配の収納所が設けられたという。こうした変遷の中に穂門郷と佐伯院の消長が秘められているが、明らかにする史料はない。

佐伯院の所在地については佐伯市古市、弥生町小倉、堅田上ノ台などが比定されているが、堅田汐月遺跡の発掘調査では墨書土器や高床式倉庫と思われる堀立柱跡などが発見され注目されたが、今後の発掘調査に期待がかけられている。

豊後大神氏の進出

一〇世紀に起こった承平・天慶の乱は武士の登場を象徴する天下の大事件であった。東の平将門も西の藤原純友も地方に土着した貴族の後裔であったが、豊後では九世紀後半に土着した大神氏が大野郡を拠点に勢力を拡大しつつあった。

「緒方家譜」によれば、庶幾から惟基までは大野郡の大領(長官)・疑大領(長官候補)・少領(副長官)などの肩書きが付され郡司職を継承してきたことが伺える。惟基は万寿二年(一〇二五)生まれ、十一世紀の人物であるが、彼の子息らは高千穂・阿南・稙田・大野・臼杵あるいは三重を号し、以後それぞれの所領とする荘・郷・院名を名乗ることになる。

『大友興廃記』の惟基に関する記事は、矛盾と誇張に満ちたものであるが、善意に解釈すれば次のようになる。

惟基の母は藤原氏の血脈を伝えているが、その縁あって惟基は京に上り、藤原氏の家人として宮廷の守備(大番役)を勤めた経験がある。帰郷して郡司職を継承したが、権門の威を借り私営田の開発に乗り出し私財を蓄積したが、国府の訴えにより罪科を問われることになった。惟基は開発した田地を寄進し、財物を献上することによって朝廷の勅許をこうむり、その経営手腕を買われて、国守を補佐する行政権を手にした。

一〇世紀末から一二世紀にかけて各地で開発が進み、旧来の郡郷制が再編される中で、これまでの郡衙の機能は国衙に吸収され郡司の職掌は狭まったが、惟基のように在庁官人となり、国守(大介)を補佐する次官(権介)となった在地有力者がいたわけである。したがって彼の子孫・大神一族が開発領主として豊後国内に進出できる条

件が整っていたと考えられる。

大神一族と佐伯荘

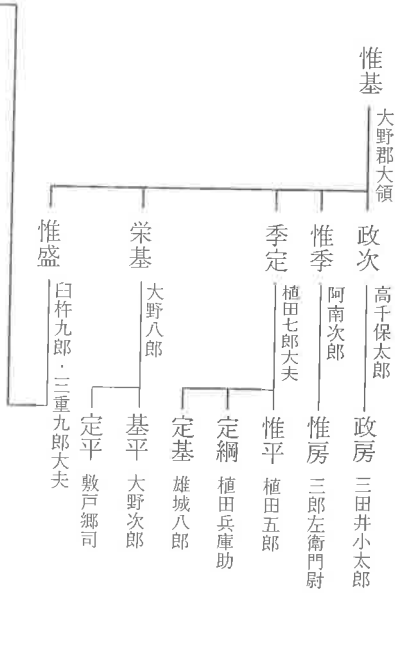
惟基の五男惟盛は臼杵九郎あるいは三重九郎太夫と称し、三重郷から臼杵へと進出、豊後掾（ぶんごのじょう）佐伯武生の女を妻にできた子が惟衡（これひら）である。佐伯武生は佐伯院の院司と思われるが国衙の在庁官人として豊後掾（判官）の肩書きを持っている。惟衡は三重次郎と称し豊後権守（次官）の肩書きは惟基以来の役職を世襲したものと思われる。

十一世紀頃から、国司が在京のまま赴任せず、任国には代理の目代を派遣して国政をとらせる、国司遥任（ようにん）化が進行した。したがって国衙機構も変化して在庁官人筆頭としての在国司職が成立したといわれ、豊後では大神氏がその実権を掌握していたわけである。

惟衡の末子・惟家は戸次三郎あるいは佐伯三郎と号し、戸次荘を立券して長男惟澄に譲り、佐伯荘を立券して次男惟安（康）に、自らは賀来荘下司職となって治承四年（一一八〇）十月に没している。

戸次荘は摂関家藤原忠通に寄進され妻宗子が建立した最勝金剛院の所領に、佐伯荘は皇室家に寄進され知恵光

【豊後大神氏略系図】



院の所領となったが、これらは皇室家や摂関家の要請を受けた豊後知行国主の命によって、大宰府府官や豊後在国司が国衙領の中から選定して立券に及んだと考えられ、大神一族は在地の徴税請負人として下地支配の下司職を確保したものである。

佐伯荘は後に八条院領として伝領されるが、領家はあくまでも知恵光院である。但し、『八条院領目録』には「知恵光院御庄・豊後国戸穴」と記され、佐伯荘ではなく戸穴荘として伝領されたことが問題となる。これは立券当時の事情を物語るが、とりあえず同荘異名であると考えておこう。

以上、荘園の成立については、故渡辺澄夫先生の論説「豊後国における皇室御領荘園の研究」ならびに「豊後国荘園公領史料集成」の解説に詳しく論述され、解明の問題点が指摘されている。

知恵光院の所在はどこか

三～四年程前、鎌倉時代に佐伯氏が年貢を納入したという知恵光院の所在が知りたくて、京都市歴史資料館に問い合わせると「国史大辞典」のコピーが送られてき

た。

・**知恵光院領**　知恵光院の所領。知恵光院の創建の地は「法勝寺北、花園向」と『拾芥抄』下にみえるが、創建者などは判然としない。鳥羽天皇の第三女璋子内親王は、応保元年(一一六一)八条院の院号を受け、鳥羽上皇の所領処分の時に、所領十二ヶ所と鳥羽の安楽寿院領などを譲られ、永暦元年(一一六〇)美福門院が没したとき、歓喜光院領を伝承した。そして、安元二年(一一七六)二月に「八条院領目録」が作られる。そのうち「知恵光院御庄」としては豊後国戸穴荘だけである。……

知恵光院は「法勝寺の北、花園の向かい」にあったと記されている。現在の京都府左京区岡崎に法勝寺町が地名として残り、平安神宮の東に位置する。法勝寺は院政時代に岡崎の地に造営された六勝寺の一つで、白河天皇の御願寺として承暦元年(一〇七七)に建立された最初で最大の寺院であったという。

ところで、講談社の「戦国全記」の中に「応仁の乱以前の京都」の再現地図が掲載されており、何を史料にしたものか知恵光院の所在が記入されている。現在の市街

【八条院領の伝領関係】

鳥羽上皇
└─八条院──春華門院──順徳天皇
美福門院　　└─後鳥羽上皇
幕府没収──後高倉院──安嘉門院──亀山上皇
後宇多天皇──昭慶門院──尊治親王

(京都府の歴史散歩)

地図と照合してみると東山区円山公園の南側、秀吉の正室北政所(高台院)が創建した高台寺の付近であった。

さらに「京都府の歴史散歩」によって、上京区に知恵光院通りと知恵光院という浄土宗の寺院が現存していることを知った。

知恵光院中立売から北へ向かうと、一条通りに出る。そこを上がった所に知恵光院(浄土宗)がある。鷹司家の祖藤原(鷹司)兼平が知恩院八世如空(如一国師)を開山として永仁元年(一二九四)に創建したとも、岡崎の法勝寺北にあった知恵光院の後身ともいう。本尊は快慶作と伝える阿弥陀三尊像。享保十五年(一七三〇)の西陣焼けや天明の大火で被災、現在の建物は安政二年(一八五五)に再建されたものである。

京都に知恵光院を訪ねて

平成九年十一月五日、一日かけて京都を巡った。三十三間堂から清水寺、護国神社、高台寺、円山公園、知恩院、平安神宮、ここからタクシーに乗り知恵光院へ向かう。運転手もよく知らないらしい、この辺ですと、車を降りて知恵光院通りを歩いていると、町家の間に知恵光院の標柱を見つけて感激した。

真新しい勅使門の向こうにあまり大きくはない本堂が見える。門脇の解説板を読んで境内に入ると、観光客の多い名刹とは違って、人気はなくひっそりと静まり返っている。鍾楼、稲荷社、地蔵堂、墓地、本堂、庫裡と一応、寺の概観を見回してから庫裡を訪れた。

知恵光院　称念山平等寺といい、浄土宗の寺である。永仁２年(1294)鷹司家の始祖関白鷹司兼平が自家の菩提寺院として如空国師と開山に請し創建したのが当院の起こりと伝え、のち、聞益上人によって塔頭も整えられ京都七光院の一つとしてますます隆盛を極めた。(中略)本堂には本尊阿弥陀如来像を祀る。また小野篁作と伝えられる六臂地蔵像を安置した地蔵堂や弁財天を祀った小堂などがある。
(京都市案内板)

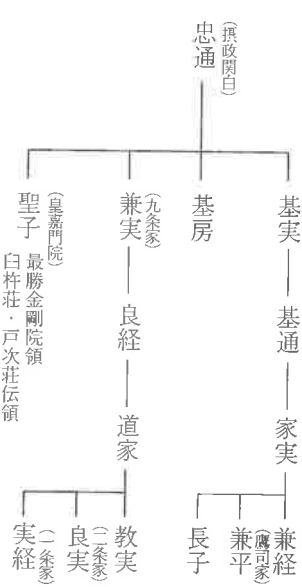
土間を入ると障子を半開きにして老婆が応対、「住職は風邪気味で休んでおります…」という傍らから老住職が起き出してきた。話を伺うと、この寺は知恩院の末寺で老住職夫妻は十数年前からここに住んでいるという。「鷹司家の菩提寺として創建当時から現在地にあった」というのは納得いかないが、明治以降、鷹司家が東京に移ったために寺は財源を失って衰退したという。昔はもっと広い寺域を有していたが、大戦中の強制疎開で塔頭四院も廃され、現在の規模に縮小されたという。

帰りに当寺に伝わる「六臂地蔵尊縁起」という冊子をいただいたが、この中にも「伏見天皇永仁元年(一二九四)、鷹司家の祖摂政関白太政大臣藤原兼平公、深く如一国師に帰依し、一条北にある花園を献じて、知恵光院を建立せらる…」と記してある。当時は八条院領を安嘉門院が継承しており、鷹司家との関連については今後の課題としておこう。

知恵光院の創立に気を取られて、寺宝である法然上人の霊筆(国宝)や快慶作と伝わる阿弥陀三尊像を拝観せずに帰ったことが残念である。

(つづく)

【藤原北家略系図】



知恵光院の墓地と本堂